様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 ２６ 日現在

機関番号：３７７０１
研究種目：基盤研究(B)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３３３０１９０

研究課題名（和文）琉球弧における地域文化の再考と地域再生プランおよび実践モデル化に関する研究

研究課題名（英文）A study on reconsideration of regional cultures and on local regeneration plans and practice models in Ryukyu arc

研究代表者
田畑　洋一（TABATA, Yoichi）

鹿児島国際大学・福祉社会学部・教授

研究者番号：２０１６３６５２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　10,400,000円、（間接経費）　3,120,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、琉球弧の島嶼に残る地域文化を福祉資源の観点から見直し、地域再生のモデル化を検討することである。対象地である琉球弧の北に位置する鹿児島県奄美諸島と南に位置する沖縄県八重山諸島は、琉球文化を基底として、相互扶助・支え合いの地域文化を残している地域である。また、過疎高齢化の進行により集落機能が低下し、保健福祉の面でも多くの課題を残している。
本研究では、琉球弧における保健福祉の現状と地域文化を活かした地域づくりの資料を収集した。結果、「結」の精神や「シマ」意識の相互扶助精神が地域づくりの原動力になっていること、「郷友会」がネットワーク型の地域づくりの可能性を持つことが示唆された。

研究成果の概要（英文）：The purpose of the study was to reconsider the traditional culture of the Ryukyu arc islands from the viewpoint of welfare resources and to examine the modeling of regional regeneration. The islands under investigation are the Amami islands in Kagoshima Prefecture and the Yaeyama islands in Okinawa Prefecture. While these islands keep the regional culture of mutual help and support based on the old Ryukyu culture, they are suffering the decreasing of the community function as a result of underpopulation and a declining birthrate.
In this study, we investigated the present state of health and welfare in these islands and collected the cases of community regeneration utilizing the regional culture. The results suggested that the sentiments of traditional mutual help of "Yui" and "Shima" work as a driving force for the community rebuilding and that "Goyukai" or "Kyoyukai" has a potential for building the network community.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学、社会福祉学

キーワード：地域福祉　コミュニティソーシャルワーク　地域リハビリテーション　琉球弧　地域文化　地域再生

１．研究開始当初の背景

(1)本研究グループは、これまで奄美諸島の離島における高齢者とそれを支える福祉サービスとのかかわりを研究してきた。結果、離島における相互扶助の根強さと住み慣れた土地で生を全うしたいという地域特性を明らかにし、離島ゆえの地域福祉的課題として保健福祉サービスの充実ばかりでなく地域や集落の維持・活性化を図ることが急務であるという認識に至った。

(2)その後、地域リハビリテーションの観点を取り入れて過疎集落の再生に関する研究会を発足し、集落の活性化の課題とその解決に向けた検討を行ってきた。結果、伝統文化が残る島嶼集落の地域文化を福祉資源の観点から掘り起こし、地域再生・活性化に活かすための調査を行う計画を立てた。また、研究知見の一般化を図るために奄美諸島と地域文化を共有する琉球弧の島々を研究対象地とすることにした。

２．研究の目的

(1)琉球弧の北に位置する鹿児島県奄美諸島および南に位置する沖縄県八重山諸島の集落における相互扶助をはじめとする地域文化、地域づくり活動を調査し、島嶼集落における地域福祉文化と地域づくり活動の関連を検討する。

(2) 鹿児島県奄美諸島および沖縄県八重山諸島の集落における住民の生活状況、福祉インフラ及び福祉サービスの内容、住民の幸福（well-being）や地域アイデンティティ等を調査し、これらの要因と地域福祉文化及び地域づくり活動との関連を検討する。

(3)地域福祉文化を活用した島嶼集落の地域づくり活動の事例を調査して、地域再生プランと実践モデルの作成を試みる。そして他の島嶼集落や山間地域集落等における適用可能性を検討する。

３．研究の方法

(1)調査対象地である琉球弧の歴史文化に関する文献研究を行い、島嶼の相互扶助に関する概念的整理を行う。島嶼地域の特性を把握するため保健福祉・教育・文化活動にかかわる方々によるシンポジウムを開催する。また、地域の伝統文化について集落区長や保健福祉にかかわる人々に聞き取り調査やグループインタビューを行う。

(2)島嶼集落に残る地域文化及び集落の現状と課題を把握するために集落区長にアンケート調査を実施する。また、島嶼における生活状況と福祉課題を把握するために高齢者および一般成人にアンケート調査を実施する。

(3)島嶼集落における見守り活動や地域づくりの現状を把握するために活動を担っている方々に聞き取り調査を実施する。あわせて活動への取り組みの資料収集を行う。

４．研究成果

(1)琉球弧の島嶼集落における互助慣行の概念的分類を行なった。互助行為は双方向の行為と片助行為に分けられ、双方向の行為はさらに、互酬的行為と再配分的行為に分けることができる。一般的に「結（ユイ）」と呼ばれる農作業などの交換労働は双方向の行為における互酬的行為に分類され、「モヤイ」と呼ばれる道普請などの共同労働は再配分的行為に分類される。また、冠婚葬祭などの手伝いや、災害などの手助けなどは片助行為に分類される。このような概念的整理を行ったうえで奄美諸島と八重山諸島における伝統的互助慣行を整理した。島嶼集落の互助活動を考察する中で、互助の担い手である集落自治会の機能を共生的互助組織として再生する必要性が指摘された。

(2)島嶼集落における保健福祉の現状と課題を奄美大島瀬戸内町と八重山諸島竹富町を事例として分析した。

①瀬戸内町の保健福祉の課題として、介護保険サービス事業者等の整備が充実していない圏域がある。このうち、離島の離島と呼ばれる与路島・請島圏域の場合は、時化等によるサービス中止が頻発する、固定桟橋のために船の揺れに対応した乗り降りが求められるなど、要支援高齢者にはサービス利用が困難な状況にある。また、陸の孤島と呼ばれる西方圏域では、土砂崩れ等による通行止め、リアス式海岸特有の曲がりくねった道路を長時間揺られなければサービス利用につながらないなどの課題がある。このため、結果的に元気でいなければシマに住み続けることはできないというイメージが定着し人口減に拍車がかかっている。

②竹富町の保健福祉の課題として、交通手段の確保が限定的・不安定である、医療的支援と福祉サービスともに脆弱で連携が難しい、島外から訪問して生活支援を行うので要支援者と直接関わる時間が限定される。介護度が上がると島をはなれなければならない、などが指摘される。これらの現実は高齢者の生きがいの保持にマイナスの影響を与えている可能性がある。奄美、八重山の両諸島においては保健福祉サービスが十分に提供されていない現状が指摘された。

(3)奄美大島瀬戸内町と八重山諸島竹富町の集落の現状と課題については次のことが指摘された。両集落とも亜熱帯に位置する島嶼ということで自然環境が良いこと、一方で自然災害が頻発すること、生活が不便であることなどに共通点が見られた。また、中央から離れた辺境の島嶼ということで、保健福祉サ

ービス体制や緊急事態への体制づくりの必要性でも共通点が見られた。「郷友会」が残っているのも中央の経済圏から離れた辺境性によるものと思われる。一方、祭りや伝統芸能などの文化面では現状に違いが目立った。自然と文化を活かした観光産業で潤う竹富町は若者が残っているため瀬戸内町と比べて祭りや集落の維持の見通しが立っていて、集落の団体構成や区長の属性も若い世代が寄与できる状態にあった。奄美と八重山の集落は気候、島嶼性、基底文化を背景にした共通性がある一方で産業や人口構成で異なる点も有していた。

(4)奄美大島の奄美市と瀬戸内町の島嶼部、八重山諸島の石垣市と竹富町に居住する高齢者の生活の現状と福祉ニーズを把握するためアンケート調査を行った。
①健康状態ではすべての調査対象地で健康な人の割合が高かった。家族の状況では対象地ごとに特徴がみられた。集落行事への参加は島嶼集落の方が高かったが、社会とのかかわり状況全般では島嶼都市部の方が高かった。将来の生活不安は島嶼集落部の方が島嶼都市部よりも高かった。一方、生きがい感は島嶼都市部の方が高かった。食生活では、栄養面のバランスを欠きやすい環境下にあった。保健医療では、島嶼集落部は医療サービスの地域格差への不満や問題がみられると同時に、健康に対するセルフケアの意識が高かった。福祉サービスでは、島嶼集落部では天候や交通手段によるサービスの中止や困難性などが生じていた。暮らし向きと地域の問題では共通して台風、交際費、老後の生活の不安があげられ、特に奄美諸島の瀬戸内町で地域の問題を感じている人が多かった。
②生きがい感に及ぼす社会関連性の影響に関する分析の結果は次の通りであった。生きがい感と健康状態は後期高齢者が低かった。一方、暮らし向きの評価は後期高齢者が高かった。社会関連性の合計得点は後期高齢者が高く、特に女性において年齢による低下が大きかった。重回帰分析の結果、男性では「生活の主体性」と「社会への関心」が生きがい感に影響を及ぼしていた。女性では「生活の主体性」「社会への関心」「身近な社会参加」「生活の安心感」それと「暮らし向き」が生きがい感に影響を及ぼしていた。生きがいある社会づくりには、性差を考慮しつつ、自律した生き方や社会の中の位置づけを図る生き方が重要であることが示唆された。

(5)島嶼地域の一般成人の生活の現状と福祉ニーズを把握するために、高齢者と同様の調査を行った。生活全般に対する不安について、「近隣・親戚との人付き合い」への不安は奄美諸島よりも八重山諸島の方が高かった。住んでいる地域で感じる問題点で 50%を超えていたのは、都市部では上位 1 位のみ、竹富町では 3 位まで、瀬戸内町では 7 位までとなり、島嶼集落部において問題を感じている人が多かった。奄美市と瀬戸内町では「ハブ」の問題、集落部である瀬戸内町と竹富町では日常の買い物の不便があがっていた。また、国や自治体に望む重点施策については、共通して「在宅介護のための、自宅を訪問するサービス」を第 1 位にあげていて、在宅福祉の充実が求められていた。

(6)奄美大島における地域づくりの事例として大和村の地域支え合い活動への取り組みを調べた。大和村は人口 1770 人の小規模自治体で、結の精神が残り緊密な人間関係に支えられた地域である。人口減少が大きく集落機能が低下傾向にあるため、地域の支え合い機能が低下していた。そこで、地域支え合いマップづくりに取り組み、住民の主体的な活動を行政が支えるという方針で、「住み慣れた島で最後まで暮らせる」地域づくりに取り組んだ。現在、11 の集落のうち 10 の集落で活動グループが生まれ、集いを目的にしたサロンと独自の活動が始まっている。集いの場所を確保するために既存の建物の一部を改装して使っているケースと役場からの補助を受けて集いの場所を新築しているケースがみられ、活動の拠点づくりが進められていた。サロンは人と人をつなげる地域づくりになり、野菜の生産から出荷・販売、あるいは惣菜作りから販売などの活動は地域の産業おこしになっていて、それらが生活リハビリや生きがいづくりへとつながっていた。マップづくりがマップづくりに終わっていないところが特徴であった。住民主体の取組により住民同士のつながりが生まれていた。活動の原動力に「結の精神」と「自分たちのシマじゃがね」「シマを愛する気持ち」という「シマ」精神があった。

(7)沖縄県の先島諸島の例として宮古市の池間島の地域づくりについて調べた。池間島は人口 700 人のうち半数近くが高齢者である。「誇り高き池間民族」と呼ぶ習慣が残っており、人々は島への愛着と強い連帯意識で結ばれている。取り組みのきっかけは「島のこどもたちは大人になると島を捨てる」という高齢者のことばであった。介護状態になっても島で暮らし続けることができるように小規模多機能居宅支援事業所を開設した。しかし、孤独死の発生を見て施設を拠点とした支援の限界を感じ、地域ぐるみによる高齢者支援の活動を始めた。高齢者の介護予防と生きがいづくりを目的として民泊事業を開始し、さらに島おこし活動を組織化して、民泊事業の活動メニューの充実を図るとともに、自然保護、文化・伝統の継承、特産物の開発による雇用の創出等に取り組んだ。その一方で、高齢者の知恵や生きる力を次世代に継承するための「アマイウムクトゥ（高齢者の知恵、生きる力や思想）」に取り組んだ。池間島の地域活性の取り組みは、人やモノ、そして人

と人との関係性という島の資源を活用することに重点を置いていた。

(8)八重山諸島の西表島の集落でも見守り活動への取り組みが始まりつつあり、活動への促進要因として「ゆいまーる」精神が指摘された。このように、奄美諸島と八重山諸島における地域づくりにおいては「結」の精神や「シマ」の意識の相互扶助精神が原動力となっていた。また、奄美諸島では「ゴウユウカイ」、八重山諸島では「キョウユウカイ」と呼ばれる「郷友会」が地域支え合い活動と連携するケースがみられ集落機能の低下を補完するネットワーク型の地域づくりの可能性もあることが指摘された。今後の課題として、島嶼地域における地域支え合い活動の形成と維持のプロセスを調べる中で伝統的な地域文化がどのように活かされているのか明らかにし、地域特性を活かした地域づくりの実現に寄与していく予定である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計６件）

①小窪　輝吉、岩崎　房子、田中　安平、田畑　洋一、高山　忠雄、玉木　千賀子、島嶼高齢者の生きがい感に及ぼす社会関連性の影響、社会福祉学、査読有、Vol.55-1、2014、13-22

②岩崎　房子、小窪　輝吉、田中　安平、田畑　洋一、高山　忠雄、玉木　千賀子、島嶼地域における高齢者の生活と福祉ニーズ、九州社会福祉学、査読有、第 10 号、2014、1-13

③田中　安平、小窪　輝吉、岩崎　房子、田畑　洋一、高山　忠雄、玉木　千賀子、奄美諸島と八重山諸島における地域住民の生活と福祉ニーズ、福祉社会学部論集、査読無、第 32 巻、第 4 号、2014、57-71

④小窪　輝吉、岩崎　房子、田中　安平、大山　朝子、田畑　洋一、高山　忠雄、玉木　千賀子、奄美群島瀬戸内町と八重山諸島竹富町の集落の現状と課題、福祉社会学部論集、査読無、第 32 巻、第 3 号、2014、83-104

⑤岩崎　房子、田中　安平、小窪　輝吉、大山　朝子、田畑　洋一、高山　忠雄、玉木　千賀子、島嶼地域における高齢者の生活と福祉ニーズ―日常生活の不安と生きがい感、食生活、保健医療、福祉サービス、地域課題、まとめ―（2）、福祉社会学部論集、査読無、第 32 巻、第 2 号、2013、27-41

⑥岩崎　房子、小窪　輝吉、田畑　洋一、田中　安平、高山　忠雄、玉木　千賀子、島嶼地域における高齢者の生活と福祉ニーズ―調査対象者の健康状態、家族の状況、社会とのかかわり状況―（1）、福祉社会学部論集、査読無、第 32 巻、第 1 号、2013、89-101

〔学会発表〕（計３件）

①小窪輝吉、田畑洋一、高山忠雄、田中安平、岩崎房子、玉木千賀子、島嶼地域高齢者の生きがい感に関連する要因―社会関連性指標との関連、日本社会福祉学会全国大会第 61 回秋季大会、2013 年 9 月 21 日、北星学園大学(札幌市厚別区)

②小窪　輝吉、田畑　洋一、島嶼地域中高年者の生きがい感に関連する要因、日本心理学会第 77 回大会、2013 年 9 月 20 日、札幌市産業振興センター(札幌市白石区)

③岩崎　房子、田中　安平、小窪　輝吉、大山　朝子、田畑　洋一、高山　忠雄、島嶼地域における高齢者の生活と福祉ニーズ―奄美諸島と八重山諸島における高齢者調査から―、日本社会福祉学会九州地区部会第 54 回研究大会、2013 年 6 月 30 日、クローバープラザ(福岡県春日市)

６．研究組織

(1)研究代表者

田畑　洋一（TABATA, Yoichi）
鹿児島国際大学・福祉社会学部・教授
研究者番号：２０１６３６５２

(2)研究分担者

高山　忠雄（TAKAYAMA, Tadao）
鹿児島国際大学・大学院福祉社会学研究科・教授
研究者番号：２０２５４５６８

田中　安平（TANAKA, Yasuhira）
鹿児島国際大学・福祉社会学部・教授
研究者番号：２０３４１６６２

小窪　輝吉（KOKUBO, Teruyoshi）
鹿児島国際大学・福祉社会学部・准教授
研究者番号：３０１４４４２１

岩崎　房子（IWASAKI, Fusako）
鹿児島国際大学・福祉社会学部・講師
研究者番号：６０３５２４７３

大山　朝子（OYAMA, Asako）
鹿児島国際大学福祉社会学部・准教授
研究者番号：６０７０８９６５

(3)連携研究者

玉木　千賀子（TAMAKI, Chikako）
沖縄大学・人文学部・准教授
研究者番号：７０４１２８５６